

不死人、カルデアにて。

ゆめびー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理修復にダークソウルの自キヤラぶつこんでみる、それだけの趣旨の小説。

一般的なぐだ子さんは果たして不死人を陥落させられるのか！

できるだけオリ主無双とかにはしたくないと思うがそう上手くいくだろうか……。

3
話

2
話

1
話

目

次

12 7 1

1話

最初の火の炉

「オアアアアアアア……」

「つ…………くふう…………はあつ…………死ぬ…………いや何回も死んだか…………」

ふー…………。と、呼吸を整え。…………さてどうするか、カアスの言う通りにしようか、でもウーラシールあんな感じになつてたし、よくはなさそだよなあ…………と考え、ふと振り向くと…………見たことの無いサインに気付く。

「…………」

自分は今は亡者、サインは見えないはずなのに……。

「…………」

周りを見る、オレンジのサインを確認。…………「俺はやつた！」「嘘つきに注意」「太陽万歳！」「この先決断が必要だ」「太陽万歳！」「太陽万歳！」……太陽万歳が多いやたら勧める物や、引き止めるような物は特に無し。

「…………えいつ」

不死人は好奇心に勝てない、好奇心で死んだつて甦れるから。というわけでサインに触れた。

「召喚に応じています」

この感じは、召喚される時の感覚、触ると召喚されるサインがあるとは初めて知つた……とかぼんやり考えながら、召喚に身を委ねた。

周りが変わる……真っ白。

「なにこ……う・

とりあえず目の前でなにか浮いてたので触れてみる……と、いろいろな情報が流れ込んだ。

「現代の常識……？ 平和……」

人は榮え、違う信仰、発展……そして何より、不死がない、とても平和……。

「そんな世界に呼ばれて何を倒すの……えつ」

人理焼却、残存人類50名程度、などの情報を見て……正直燃えるな、と思つてしまつた。

「さて、大方読んだし、大丈夫。」

召喚された直後に言うべきらしい口上も決めた、ほかの事も記憶力には自信がある

し、忘れはしないだろう。

「……出発……」

もう一度、サインに触れ、再度転送が始まる。

「召喚に応じています」

特異点F

……天秤の守り手よ!!』

召喚、成功しなければ大分きついだろう、しかし、祈るしかない……。

「三本……から……青色?」

「青色……初めてみるパターンね……」

『頼むよりツカちゃん……!』

光が、爆発し――

「……サー・ヴァン・ト・キャスター、呼び声に応じ……現界しました……アナタが召喚者です

ホスト

ね?」

「あつ、はいつ!」

少し……いやだいぶ灰で汚れた服装、スカートの裾は血濡れ……どこかで聞いた服装の

ような。

そして右手にレイピア、左には杖

「よかつた、普通のサーヴァントで……つひいつ!?」

「?どうかしました?所t y……（硬直）」

『ん、どうかしたの2人とm!』

2人とドクターがフードでよく見えない顔を見て、硬直した。

「……ああ…召喚されてもこの姿でしたか…うーむ」

私は、そのサーヴァントの手が見えて…硬直した。

「……干からびてる……？」

全身が、干からびていました。

「まさかの亡者姿での召喚ですか……」

所長とマシユがこっちに来て

「ちよ、ちよつと！大丈夫なのこれ！」

「全身が干からびているサーヴァントなんて聞いたことがありません！」

『こわ……』

「お、落ち着いて……」

「落ち着けるわけないでしょ!?ステータス確認しなさい！まずはそこからよ!!」

「はっ、はいっ！」

前に聞いたやり方で、ステータスを覗く……

真名 : rey

Class : キャスター

Status : 筋力D 魔力A

耐久E 幸運C

敏捷C 宝具A —

「所長！ 見た感じすごく偏ってます！」

「魔力がAで宝具がAー、他はC以下……」

「絶妙な偏り具合ですね……」

『完全に魔力だけか……』

「まあそういうビルトですし」

ぎやつ、と声を上げる所長……そしてキャスターは人の肌になっていた

「あれ、肌……？」

「ああ、人間性キメてきました、これで驚かれることも無いかと」

『人間性をキメる……？ そんな栄養ドリンクみたいな……』

潤い（？）を取り戻した顔は、銀の髪と銀の瞳、そしておそらくノーメイクな顔、結構綺麗な顔で……

「先輩……？ 先輩っ！」

「……はつ……」

『明らかに見惚れてたねえリツカちゃん』

「うるさいドクター」

『こんな平民顔に見惚れますか』

reyyは軽く微笑んでいる

「まあ取り敢えず、行くわよ、リツカ、マシユ」

「あ、了解、所長」

『とりあえず……あっちの方向の学校に入ろう、そこで色々試そう』

「はいっ」

そして、その学校で、色々と起ころのですが……それは次のお話

2話

学校（廃墟）

「……スケルトン弱かつたですね…」

「いや貴女が強すぎるのよ」

「凄かつたよねえ」

「レイピアなのに難ぎ払つてましたからね……どういう強度ですかそれ」

『魔力量も凄かつたよ…宝具なのかい?』

「まあ…頑張つて強化しましたからね…原盤まで使いましたし」

小ロンドのあの人にはお世話になつたとの事、小ロンドつて何処。

「どうか、キャスターなのにまだ魔術使つてないわよね貴女」

「あー、そういえばそうですね…無駄打ちは避けたいので使つてなかつたのですが…」「まあ、ちゃんと戦つてくれるからいいけれど」

学校の廃墟の教室のひとつに入り。

「……さて、じやあ…貴女に質問、貴女どこの英靈なの?」

「どこの…えーっと…ロードラン、です」

「……ロードラン？」

所長が首を捻る、ロードランという土地は知らないようだ。

『…………もしかして…「火の時代」…かい？』

「つ……!？」

「あ、はい、そうです。」

「まつて火の時代！そんな、ということは貴女……！」

所長が混乱した。

「えつ、えつ？」

「しょ、所長？」

『……マシユ、「魂の物質化」は知っているね？』

「は、はい…第3魔法…でしたよね？」

『その「魂の物質化」がそこら中で自然発生していた、そんな時代だよ』

「……は…？」

マシユが硬直した

「……みんな不老不死になつてたつてこと？」

「全員が全員ではないんですけどね…」

「とんでもない時代があつたんだなあ

『……その時代から名前が残る英雄はいるけど、その中に rey という名はない。』
 「……でも、1人だけ、名前も、姿も、性別さえも分からぬ英雄がいるの……それが」

火継ぎの英雄

『ある伝承では「莫大な力で大剣を片手で振るう剣士」、別の伝承では「闇に潜み必殺の一撃を放つ盗賊』』

「他には「信仰によつて物語を顕現させる聖職者」、「世の總てを識る魔術師」とかね」「伝わり方が様々：正直全部別人の伝承と言われた方が納得できますね……」「でも、貴女がそれの様だし……どういう人物かは確定ね」

と、言つた所長

「んー、まあそもそも一極集中ばかりでもないんですけどね：『グラント振り回す聖職ゴリラ』とか『奇跡と魔術を使わぬ魔術師』とか『殺した奴の防具武器指輪五葱頭に鉤爪×2のみ変態』とかもいましたね……」

「……は？」

何の話だ、というような顔をする所長

「あいつら人間性キメると侵入してくるから大変なんですね……」

『侵入つて……？』

「えーと、闇靈赤ファンと呼んでいたんですけど、簡単に言うと、平行世界から侵入してくる・火継ぎの使命を帶びた者です。

「平行世界…っ！」

「第二魔法!?」

『そんな…マジか…そんなにやばい時代だとは…第三魔法だけじゃなく第二魔法まで…』

「使命帶びてるのに他の同じ使命の人を妨害するんだ…」

「中には使命を放棄してる人もいるみたいです」

「ええ…」

流石にそれは、駄目だろう、と言う顔をするマシユ達

『……ち、ちなみに、その侵入つて…流石に、簡単には出来ないんだろう…？』

「所定の道具赤い瞳のオーブがあれば簡単に、数十秒から1～2分程度で侵入できます」

『嘘だろ…』

「てか貴女そんな事するような女だつたのね!?」

「まあ一応ダークレイスしますし」

「とまあ、色々とre eyについてわかつたのだが…」

「……そういえば話もやろうとしたことも進んでないわね……」
肝心の rey がやれる事はなんなのか、は確認できませんでした。

3話

ひと通り騒いだあと

「ほら、スキル見なさい」

「はーい、えーと」

前にステータスを見た方法でスキルを見る、と

「魔術（闇）】B

「最速詠唱】A

「戦闘続行（不死）】C

「武芸の極地】D

「魔術（魂）】A

「不死の呪い】EX

「ソウルの業】EX

「……【魔術（魂）】？」

「多分「ソウル魔術」の事ね」

「です、その通りです、」

『ソウル魔術……火の時代ではメインで使われていた魔術……だつたかな？……不死になる前からだいたい使えたのかい？』

「それでもなきや火継ぎなんて……といいそうな声色で

「いえいえ、最下級の「ソウルの矢」しか不死になる前は使えませんでしたよ……いやー、実は元々かなり落ちこぼれでして……」

「嘘お……」

「なんでそんなのが火継ぎなんかしたんだ、という顔で見つめる所長

「……選ばれた不死のみが、巡礼の地に行くことが出来る……それにたまたま選ばれた、そして何とか火を継いだ、それだけですから」

『……凄いもんだね……』

「それには、不死ですし、どうにでも出来ましたよ、何十、何百と死にましたけど

あはは、と苦笑い

「……なんというか……思つてたより凄いんだね……」

「お褒め頂き光榮ですマスター……なんちやつて」

えへー、とちょい照れ

「んじやあ、こつちの——

「マスター危ないつ!!」

ガギインツと金属に金属が当たる音

「つ!!」

「…防がれましたか」

『嘘だろ!? サーヴアント!?!』

「ちょっと口マニ!! ちゃんとサーチしひきなさいよ!!」

『ホントごめん!』

「先輩こちらへ！」

「あつ、うんつ！」

鎖鎌？を持つた、黒モヤに包まれたサーヴアントと相対する

「……」

「つ！」

相手が鎖鎌で切りつけ、それを盾で受け、レイピアで反撃するも、カス当たり……

「痛つ……」

「……思つたより効きますね……」

かすり傷程度の当たり具合だったのだが、とても痛そうな表情を浮かべる相手。

『やつぱりあの魔力量はサーヴアントでもキツいんだな……』

「はつ！」

レイピアの連撃、しかし距離を取られ。

「この……っ!!」

相手の飛びかかるような一撃、それを盾で「弾く」。

「な……っ!?」

体制を崩した相手の腹部に、レイピアに体重をかけて、突き刺す。

「こふ……っ」

「それっ!!」

そしてそのまま、地面に叩きつけるように押し込む、明らかに致命傷だ……。

「カ……ハ……ツ」

そしてレイピアを引き抜き……襲撃者は霞となつて消えた。

「ふう……」

「ひえ…………」

『は、反応消失…エツグいな……』

「でも…効果的っぽいですね…?」

「かつこよ……」

『どうかそのサイズの盾でパリイカ…相当難しいだろうに』

「ふふ…慣れですよ」

若干乾いた笑みで……

「……死に覚えつて事?」

「その通りです」

『やつぱりか……』

襲撃者を倒し、そろそろ移動するべきか、というわけで移動開始するのでした。